

„Demian“ への道

一社会的、個人的状況を手掛りにして一

磯 弘 治

Hermann Hesse の作品は第一次世界大戦を境として、それまでを前期、以後を後期とするのが一般的な見方となっているが、この小論では詩人 Hesse が „Demian“ (1917年に書かれ、1919年に出版される) を通じて表現しようと試みたもの、またその故に „Demian“ が詩人 Hesse の転換期の作品として位置付けられる点を、„Demian“ 誕生の背景である第一次大戦当時の Hesse の生活状況並びに精神分析治療を受けることから次第に興味をいただき始めたと思われる心理学的領域との関連を合わせて考察してみたいと思う。

はじめに前期作品の傾向にふれてみると、„Peter Camenzind“ (1904) „Unterm Rad“ (1906) „Knulp“ (1915) などの作品では、失恋、主人公をとりまいている大人達の無理解、若者らしい夢(理想)と現実の衝突から生ずる挫折などによって傷つく主人公のこころと寂寥感が殊更に際立っていた。更に、これが読者をひきつける前期作品の魅力でもあるのだが、逃避とも思われる romantisch な自然への感情移入があった。

„Peter Camenzind“ に於ける Peter のさまざまな女性への憧憬、„Unterm Rad“ に於いては Heilner の神学校からの逃走、そして „Knulp“ では、主人公のアウトサイダー的な言動などが示すものは、彼方に心の安息と感動をそして充足を与えてくれる「何かあるもの」を求める詩人 Hesse のひたむきな思いと同時に、彼を取り巻く状況を変化させようとする詩人の努力だという

注 テキストは Hermann Hesse Gesammelte Werke Band 5 Demian Suhrkamp Verlag 1970 本文中では (S.) と記す。

ことができる。実際、1895年に Basel へ、1904年には Gaienhofen へ、1911年にインド旅行、そして1912年には Bern へと度々居所を変えている。

しかし、傷つきやすい魂の純粹さだけを賛美できない側面があるのも否定できない、即ち„Unterm Rad“では主人公 Hans Giebenrath の自殺、„Peter Camenzind“では父の病気という外的要因で帰郷しそこで再出発を決意すること、そして „Knulp“では失意の主人公の死をやさしく慰める神の言葉など他への依存傾向、自己の内的な弱さをかばおうとする点が見受けられる。

上記の作品を含めて Hesse の作品のほとんどが自己告白であるわけだが、¹⁾如何なる犠牲を払おうとも真実を語ることが何よりも優先されそしてその時芸術作品が自己の存在の真実に手さぐりするひとつの手段となることをはっきりと自覚すればこそ „Demian“の冒頭で詩人自ら彼の「„Demian“が自己告白であり架空の人間のそれではない」と述べている。(S, 7) したがって „Demian“誕生の要因のひとつと考えられる当時の Hesse の個人的な側面にふれることは意味があると思われる。

Hesse は第一次大戦の頃について、随想 „Beim Einzug in ein neues Haus“(1931)で次のように記している。

Es kam, nicht ganz zwei Jahre nach unsrer Übersiedlung, der Weltkrieg, es kam für mich die Zerstörung meiner Freiheit und Unabhängigkeit, es kam die große moralische Krise durch den Krieg, die mich zwang, mein ganzes Denken und und meine ganze Arbeit neu zu begründen,……während ich durch den Krieg amtlich überanstrengt und moralisch immer mehr verzweifelt war, bröckelte langsam alles²⁾ das zusammen, was bis dahin mein Glück gewesen war,

第一次世界大戦を引き起こしたヨーロッパの状況は、ドイツ以外の列強即

1) Hermann Hesse Gesammelte Werke Band11 S.81.

2) Hesse G. W. Bd. 10 S.151.

ちフランス、イギリス、ロシアの対ドイツ政策も批判的に検討せねばならないという重要な側面があるにせよ、ドイツが三列強をヨーロッパから退かせ自らがヨーロッパの盟主たらんとしたドイツ帝国主義の独善的膨張主義とも言うべきものが大戦勃発の主たる要因であることは否定できないであろう。1914年に勃発した第一次世界大戦という混乱した状況の中で祖国ドイツは極端な愛国的風潮、自己のあらゆる欲望を即座に満足させようとする Lebensprinzip が蔓延しており、いたずらに愛国的であることなどに現われている価値体系の専制的単一化があるばかりであった。戦争という集団幻想にのみこまれ自己自身を、個として人間本来の姿を、見失ってしまった祖国の同胞達への警鐘として、同時にこのような状況のもとで懸命に自己を守るために Hesse は 1914 年 „O, Freunde, nicht diese Töne!“ を発表した。しかしその結果 Hesse は売国奴の非難を浴び、更に戦争捕虜達のための奉仕活動による肉体的疲労が加わり詩人の精神と生活は覆がえされるのである。

„O, Freunde, nicht diese Töne!“ を Hesse は謙虚に発表したにも拘らず、思いもかけぬ報道機関を始めとする世間の非難と中傷は、„Peter Camenzind“ の発表以来、比較的順調であった作家としての道を歩んできた Hesse にとって初めての経験であり失望と途惑いを与えた。詩人の身边には、更に続く、1916年に父 Johannes の死、そして三男 Martin が重病、続いて不幸 Bern へ移り住んだ時から不安と息苦しさを感じていた Maria 夫人のノイローゼが悪化したことなどである。結局 Hesse 自身も神経衰弱のため療養せざるをえなくなる。Helena Welte 夫人に宛てた書簡で詩人は自分の病いについて次のように記している。

私のなかでも、ある危機が成長しつつあります。勿論、内体的なそれは象徴的な意味を持てはいるものの、副次的なものに過ぎません。³⁾

1916年の4月から6月の終りにかけて、Luzern 郊外の Sonnmatt のクリ

3) H. Hesse Gesammelte Briefe Erster Band Suhrkamp Verlag S.324

ニックで Hesse は C.G. Jung の弟子である J. B. Lang と 12 回に及ぶ最初の精神分析のための会合を持ち、それ以後毎週 Bern から Luzern へ治療のために通っている。この精神分析の専門家 Lang との親交はそれまで科学的な心理学に少しの興味も示していなかった Hesse を Jung や Freud の心理学とその認識へと導びいたのである。⁴⁾

傷心の日々のなかで、Hesse は自分自身をみつめなおそうとする、そして Romain Rolland をはじめとする少数ではあるが友情と誠実に溢れた励ましと精神分析への興味などによって、世界の Chaos をきっかけとして気付いた自己の内部にもある Chaos を直視する勇気を得る、そして Hesse 自身の言葉をかりると “...oft aufglühenden, oft erlöschenden Hoffnung, jenseits des Chaos wieder Natur, wieder Unschuld zu finden”⁵⁾ と言えるまでに回復する。

新しい日々に向って再出発しようとする時 Hesse は過去を振り返り、その辿ってきた日々を作品として表現することで意義づけようとする。この現われが „Demian“ の比較的小説らしい構成をなしている第 1 章から第 3 章の部分であると言える。

第 1 章 Zwei Welten. 第 2 章 Kain. 第 3 章 Schächer の展開を簡単に記しておくと、

厳格だが愛と清らかさに満ちた家庭に育まれたラテン語 学校生 Emil Sinclair が子供らしい虚栄心から嘘をついてしまう、その結果自分の慣れ親んでいる世界とは全く異った世界に居る不良少年 Franz Kromer につきまとわれ苦しめられる。そんな時、転校生で他の生徒達とは一風異った雰囲気を持つ Demian によって Sinclair はその苦境を救われる。しかしこの間に、自分とは無縁であり、また恐れさえ感じられていた eine fremde Welt の存在が、そして典型的なキリスト教徒の敬虔な家庭での教えによって身に備わっ

4) Hesse G. W. Bd.10 S.48

5) Hesse G. W. Bd.6 S.402

たものとは全く異った Denkweis や Gesichtspunkt が Sinclair の心に入り込んでしまったことに気づく。その後この物語は、不思議な感動をともなった Demian との出会いが、彼への興味、そして更には憧れとなり、また Demian の母 Eva 夫人との不可思議な心の交わりとによって Sinclair の心的状況が更に変化する様が描かれている。

以上のような3章の要点を Hesse の内的外的状況にあてはめると、少年 Sinclair を囲んでいたキリスト教徒的な家庭は Hesse 自身の作家生活の反映といえることができる、即ち1904年に „Peter Camenzind“ を発表して好評を博し、そして Maria Bernoulli と結婚、9月には Boden 湖畔の Gaienhofen に居を移し、豊かではないが、自然と心を許せる友人に囲れた生活を始めて以来、少くとも外面的には順調だったのである。Sinclair が両親に対してもつ秘密やいつわりが、自然な心理的發展の一過程であるのと同様に、大戦時の祖国ドイツの方向を誤った熱狂の状況に対するプロテストも詩人の本性にとっては、ごく自然なことだったのだが、それにも拘わらず Hesse が被らねばならなかった謂無き汚名と非難、それにともなう詩人の精神的疲労が不良少年と Sinclair との関りを通じて描かれているのであり更に、Lang との交友を契機に知り、そして自らも研究した心理学的領域の影響が、物語のタイトルでもある Demian との関りのうちに象徴的に描かれていると思われる。Hesse と心理学との関連について Malte Dahrendorf は次のように述べている。

Es ist C.G. Jung gewesen, von dem Wirkungen auf Hermann Hesse ausgegangen sind, die wir entscheidend nennen müssen und die jene allbekannte Wendung des Dichters in der Krise 1916/17 wesentlich mitbestimmen⁶⁾ haben

したがって „Demian“ はあの苦痛に満ちた時間が、Hesse にとって何で

6) Malte Dahrendorf: Hermann Hesses „Demian“ und C. G. Jung. S.82.
Germanisch-Romanisch Monatschrift Neue Folge.8. 1958

あったのかを確認するとともに、その苦痛に訣別をつけようとする試み、換言すれば自己を客観的に見つめ、それを書き表わすことで自己自身を脱皮させるいわば Selbstrealisierung の目覚めといえるであろう。

すでに多くの作品で夢や空想が重要なモチーフとなっていたが、„Demian“ではその傾向が一層顕著である。ひとりの人間の置かれている環境が夢とか空想を生みだす因果関係を構成するものだとすれば、“Kindheit des Zaubers” (1923) で「小さなインドの偶像の形をした Pan の神や、さらに他の神々が私の幼年時代の世話をしてくれ、私が読み書きできないずっと以前に、私に東洋の大昔の絵や考え方をいっぱい詰め込んでくれた」⁷⁾と述べていることから解るとおり、ヨーロッパ文化（キリスト教文化）とは異質なアジア文化にも囲まれて育った Hesse の場合、彼の Seele が多分に夢や空想に浸ったのはごく自然なことであったのだろう。

Ich fand, alles in allem, in ihrer (Freud, Jung, Steckel) Auffassung des seelischen Geschehns fast alle meine aus Dichtern and eigenen Beobachtungen gewonnen Ahnungen bestätigt.⁸⁾

Hesse は上記のように、文学ばかりでなく、Leben 自体にとって夢や空想が如何に見逃せない貴重な側面をもつものかを近代心理学が彼に教えたことを認めている。そこで、Dahrendorf が、「たとえ、Jung の精神分析が物語の中で、特殊な宗教的体験がその裏に秘んでいる暗号としてだけ理解されるとしても、Jung の精神分析は我々にとって„Demian“のみならず Hesse の他の作品や詩人の姿を理解するための不可欠な資料である」⁹⁾と強調している Hesse と C.G. Jung の関連にふれてみたい。「彼の二つの発見、即ち “das kollektive Unbewußte” “die psychologischen Typen” がその中心をなし

7) Hesse G.W. Bd. 6 S.371

8) Hesse G. W. Bd.10 S.48

9) Malte Dahrendorf : Hermann Hesses “Demian” und C. G. Jung S.89.

ている心理学の創始者¹⁰⁾」である Jung は Seele を次のように三段階に分けている。

1. das Bewußtsein 2. das persönliche Unbewußte 3. das kollektive Unbewußte”そして das kollektive Unbewußte は次のように定義されている。“das kollektive Unbewußte, welches als ein Erbgut an Vorstellungsmöglichkeiten nicht individuell, sondern allgemein menschlich, ja sogar allgemein tiersch ist und die eigentliche Grundlage des individuell Seelischen darstellt”¹¹⁾

この das kollektive Unbewußte の定義の影響が „Demian“ のいたるところで見い出される。例えば

Wir bestehen aber aus dem ganzen Bestand der Welt, jeder von uns, und ebenso wie unser Körper die Stammtafeln der Entwicklung bis zum Fisch, und noch viel weiter zurück in sich trägt, so haben wir in der Seele alles, was je in Menschenseelen gelebt hat (S 105)

論点を、この das kollektive Unbewußte にしぼり、更に Jung の説明を要約すると、das kollektive Unbewußte は、ずっと歴史を溯ったあらゆる体験の沈積物であり、また個人生活を規定する生き生きとした Reaktions-system であり Bereitschaftssystem なのである。das kollektive Unbewußte は Instink の源泉であり、本能つまり生の源泉から創造的なものが流れるのである、したがって das kollektive Unbewußte はただ歴史的制約であるだけでなく、同時に創造的刺激をも生むのである。

J.B. Lang との精神分析療法が Hesse の心の奥から引き出した無意識的なものを象徴している Demian が Sinclair に次のような忠告を与える。

「われわれの内部に、すべてを知り、すべてを望み、すべてをわれわれ自

10) Hesse G. W. Bd.12.

11) Gesammelte Werke C.G. Jung Walter Verlag Bd.8 S.176

身以上により良くなすものがいるのを知るとはとてもよいことだ」

これは das kollektive Unbewußte を暗示してはいないだろうか。意識の代表とも言うべき科学的知識が豊富になり、狭い意味に於ける社会秩序の維持に合わせた思考方法、あるいは信仰すらも組織的にかたちづけられ、その結果、人智を超えたあるいは、因果律的な見方や合理的な考え方などで理解できぬものは簡単に不合理として片付けられ、極端な場合は危険であると拒否されてしまう。更に自己の内面についてさえも、心の暗黒の部分自ら恐れるあまり、それを悪魔などに擬人化することで隠蔽しようさえする。Hesse はこのような偏向した Leben について Demian に次のように語らせている。「しかし世界は他のものからも成り立っている。……世界のこの部分全体、この半分全体がごまかされ、黙殺されている」(S62)

万能の神でない人間の意識は、すべてを包含することは不可能であり、当然そこには、“entweder A oder B” が生ずる。そしてある基準をよりどころとする選択は必然的に偏るといえるであろう。このような Leben の歩みを、心の深奥の das kollektive Unbewußte が本来の方向へと矯生するのである。空想や夢、更には所謂直感と呼ばれるものは意識界だけでは困難な問題の解決に手掛りを与え得るし、また解明することもしばしばある、つまり心の奥底にあって普段は表面にあらわれない偉大な体験能力としての無意識が意識と手をたずさえて Leben を支えているのである。das kollektive Unbewußte は Leben の連続とも言える歴史の原動力であり、その力による歴史の創造こそが人間に課せられた使命であることを暗示するために夢や空想となつてしばしば浮びあがってくるのである。したがって前述の Demian の忠告は意識の機能と同様の時によっては、それ以上の機能を発揮する das kollektive Unbewußte の存在意義を Hesse が明確に認識したことを示めしているといえるだろう。

Jung は意識の主体を自我 (Ich)、無意識を含めた¹²⁾こころ全体の主体を自己 (Selbst) とよんでいるが、このこころ全体の主体 Selbst に注目してみる

12) Gesammelte Werke C.G. Jung. Bd.6. S.471.

と、例えば、神経症患者や同性愛者などにも、外的には如何に異状としか見えないものの中にも人格的全体への内部から望まれてはいるが、しかし不安の故に逃れようとする発展の印として解されねばならないもの、即ち個性は勿論こちらの全ての可能性を実現しようとする *Selbstrealisierung* の現われと考えねばならぬ側面が同時にあり、このような *Selbstrealisierung* を *Leben* の最終目標とする考え方が „*Demian*“ の扉に掲げられたている言葉

Ich wollte nichts als das zu leben versuchen, was von selber aus mir heraus wollte. Warum war das so sehr schwer? (S.7)

あるいは

Es gab keine, keine, keine Pflicht für erwachte Menschen als die eine :
sich selber zu suchen, in sich fest zu werden, den eigenen Weg
vorwärts zu tasten, einerlei wohin er führte. (S126)

の中にみごとに反映されていると思われる。

第4章以後の „*Demian*“ の展開は Emil Sinclair と名づけられた主人公の内面的成長過程が、あるいは *Leben* の目標としての *Selbstrealisierung* の過程が描かれている。やがて *Demian* と別れたあと、しかし Sinclair は父母のもとでの明るく清らかな世界に戻ることはできず、とはいえ確固たる *Leben* の拠所を得ることもできなかった。一度は *Demian* に教えられた高邁な精神を求めはしたが、今は「ならず者で不潔渾で、酔っぱらってよごれた私」になり「外的には墮落した、発作的な衝動のままに動く自己破壊的な日々」をおくっている。そんな Sinclair の前に一人の若い女が出現する、気高いその姿を彼は Beatrice と名付ける、やがて彼女を一枚の肖像画に描くことにより、再び快楽よりも清浄さを得ようと試みる。完成した肖像画の少女の顔は現実の彼女のそれではなかった。やがてしばしば Sinclair の夢にまで現われることで、その顔が実は *Demian* のそれであったことに気づく。

Dahrendorf は「Beatrice, Frau Eva などの人物は Hesse 自身によっ

てというよりも、むしろ C. G. Jung によって語られている¹³⁾と述べているが、Sinclair の夢は、彼のより高次の自己自身の象徴的な夢に他ならず、放蕩無頼な生活のなかで、即ちさまざまな意欲の衝突にあえぎながら、主人公は Demian を無自覚だが内心で求め手探りしているのである。Demian は可能性として Sinclair の内部にも存在しており、Beatrice と名付けられた少女の肖像画が結果的には Demian であったのは、内的可能性を実現させようとする das kollektive Unbewußte の働きかけを意味するのであり、Sinclair の自己破壊的な日々は、前述した、不安の故に逃れようとするより高次な存在への発展の印なのである。

Beatrice の肖像を独自の祭壇にすることで再び自己自身への道を歩みはじめた Sinclair は Demian が暗示していた「神であり、悪魔であり明るい世界と暗い世界を内蔵している神」(S 109) への礼拝を孤独に行っているオルガン奏者 Pistorius に会う、そして彼との対話を通じて、自分達の内なる Seele が欲するものを恐れずに実行するように励まされる。Sinclair は、かつて Demian が Kromer の強迫から彼を救ったように、今度は、禁欲生活が一段高い精神的な道だとしながらも、その故に悩み、遂には自殺を図る少年 Knauer を助け「……ぼく達は人間だ。ぼく達は神々を作りそれと戦うのだ。神々はぼく達を祝福する」(S 120) と悟し、互いに自分の本質から出てくるものを実行する道を歩もうと励ます。

Sinclair は更に一步自己自身への道を進んだといえるだろう。「私を元気づけたものは、私自身の内部の発見の進歩であり、私自身の夢や思想や予感に対する信頼の増大であり、そして私自身の内部にある力の自覚の増大であった」(S 120) という言葉がそれを示している、しかし同時に Knauer に見られる如く、生きようとする強い意志はあるにも拘らず、その表現し得る道を完全にはまだ見出しきではない側面もそこにはある。

Hesse が自己自身を見いだそうと努力する姿を描く際、明と暗、善と悪、

13) Malte Dahrendorf: H. Hesses "Demian" und C.G. Jung S.91.

公認された神の世界と黙殺された悪魔の世界などの対立性も主要なモチーフとなっている。これらの対立性は、大戦という大きな Chaos を契機に気付いた自己の内的な Chaos のディレンマの現われでもあるが、むしろ現状を越えてより良い存在、異った存在を願うこころの深淵からの意識の主体 Ich への刺激を示していると考えるべきだろう。人生を歩むための体験的推積である das kollektive Unbewußte の欲求が、非現的あるいは誤謬であるはずがなく、意識と無意識が一見対立している如見えはするが、実は互いに補いながら Leben を継続し高めようとしているのである。したがって第5章に於ける「巨大な鳥」と「卵」の比較も、Selbstrealisierung のための共同作用を示していると考えられる。卵として一応安定している das Bewußtsein を das kollektive Unbewußte が刺激し、破壊してはじめて巨大な鳥は誕生するのであり、そしてその時、生命体としての卵はより高次の存在へと新たな一歩を踏み出したのである。

以上のことをふまえて、Hesse が引用している Novalis の言葉 “Schicksal und Gemüt sind Namen eines Begriffs” (S 84) について考えてみると、これは苦悩のはてに詩人 Hesse が再び立ちあがろうとする決意の現れといえる。Hesse は人間内部の深淵を「無意識界」あるいは「Seele」と呼んでおり¹⁴⁾、Gemüt は Seele の呼びかけに他ならない。人間あるいはこころの表面とも言える意識が安定していても、更に奥のより内なるものが、たとえ現在の意識と対立するものであろうとも、高次の存在へ導くために意識をゆり動かす、その結果この Seele の呼びかけが数々の対立性を生みだすのである。したがって、Selbstrealisierung の過程で必然的に生じるところのこの対立の間を人間は歩まねばならない、それが運命なのである。このように生ずる運命を誰が愛さずにいられるであろうか。

運命への愛に目覚めた Sinclair をめぐり更に物語は展開してゆくが、Demian の母 Eva 夫人について次の一節がある。

14) Hesse G. W. Bd.11. S. 197.

Das war mein Traumbild ! Das war sie, die große, fast männliche Frauenfigur, ihrem Sohne ähnlich, mit Zügen von Mütterlichkeit, Zügen von Strenge, Zügen von tiefer Leidenschaft, schön uud verlockend, schön und unnahbar, Dämon uud Mutter, Schicksal und Geliebte. Das war sie ! (S 130)

すべての対立を内に蔵し、しかもそれが調和を保ち、あたかも宗教的シンボルの如に述べられている Eva 夫人の Bild は、Hesse にとって Selbstrealisierung をなした人間の理想像であるのだろうか、しかし完全な Selbstrealisierung は可能なのだろうか、むしろ Eva 夫人の Bild は Leben の唯一無二の目標であり、生ある限り常により高次へと自己を昇華させたいと願う詩人 Hesse が自己の Leben のありようを再確認したのだと思われる。したがって „Demian“ に於いても勿論 Sinclair はこの理想に到達してはいない、ただ出征し負傷した Sinclair が友であり導き手であった Demian と自分の姿が今や酷似しているのに気づく描写で物語は終わっている。これは das kollektive Unbewußte の象徴としての Demian が意識を困乱させはしたが、自我に問いかけ、刺激し、そして常に見守りながらやがて意識内に定着し調和を保ったことを示しており、Selbstrealisierung の一過程の終了を意味しているのである。Demian, Beatrice, Pistorius, Knauer など Sinclair が出会った様々な Bilder は、彼自身の内的可能性としての未知なるものが、各々異った Bild となった彼の前に出現したといえるだろう。

Hesse は第一次大戦以後の困難だった内的、外的状況を Selbstrealisierung の一過程として捉えることで克服し、そして „Demian“ の最終章のタイトル Anfang von Ende の如く Erzählung „Demian“ とともに自己自身への道に続く新たな第一歩を踏み出したのであり、この歩みは、Hesse が „Demian“ 発表の際、著者名を自分の名前でなく Emil Sinclair としたことからも窺える。

Hesse の興味が精神分析から次第に、より詳細な近代心理学の領域へと拡

大した結果、彼は混沌からの脱出手段として無意識の再認識を見い出したと言える。因みに、Hugo Ball は、精神分析と Demian の関連について次のように述べている。

「集中的な、そして新しい精神療法のあらゆる問題におよぶ対話の成果がドイツ文学の傑作 Hesse の „Demian“¹⁵⁾である」

第4章以後 „Demian“ の展開は以前の章のような明確な小説らしい構成をなしておらず、関連を見いだすのが困難な程に過去と現在の時間の枠が超越されていたり、虚構の世界と現実の出来事が複雑微妙に絡みあっている。Hesse がまるで、心に浮んでくるものをそのまま素直に記しているかの如き印象を与えるこの小説構成は、Freud が精神の苦痛を訴える患者に対し用いた freie Assoziation を思い起させはしないだろうか。この構成は、無意識を解放し、心の奥底を知り苦悩する自我を自ら救い高めようとする試み、即ち Andre Gide が最高的美徳と賛美した「自己だけに聞き、自己だけを尊敬する従順さである」¹⁶⁾ Eigensinn の現われに他ならないのである。したがって、たとえ前期作品の持つ美しさが失われようとも、読者に露悪な印象を与えようとも Hesse は „Demian“ を他の形式では表現しえなかったといえる。また、大戦当時以上に述べた Hesse の態度に対する Romain Rolland の称讃¹⁷⁾は Faust に見る次の言葉：「自由や生活を常に戦い取らねばならぬ者だけが自由や生活を得るのである」¹⁸⁾ にこめられている Goethe の精神と Hesse のそれが一致していたからであり、混乱の日々を戦い抜いた Hesse の真に Goethe 的精神の所産が „Demian“ であると思うのである。

15) Hugo Ball: Hermann Hesse. Suhrkamp. 1972. S.137.

16) André Gide 「秋の断想」 S.245 原田義人訳

17) Romain Rolland: 「戦いを超えて」 宮本正晴訳

彼は Hesse について、「悪魔的な戦争のなかで真に Goethe 的な態度を保持した唯一の人」と述べている。

18) Johann Wolfgang von Goethe Werke. Hamburger Ausgabe, Christian Wegner Verlag Bd. 3 Faust. zweiter Teil S.248.